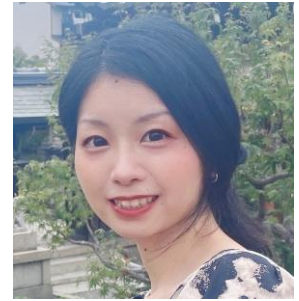


新任教員からのあいさつ

2026年4月からヨーロッパ・アメリカ学科に新たに平井彩可先生が加わりました。専門は西洋美術史です。



西洋美術史、特に15世紀イタリア（ルネサンスとも呼ばれる時代です）の絵画を研究しています。西洋文化圏における“美”の概念の基礎は古代芸術にあります。ヨーロッパ地域では、キリスト教が支配的になった中世において、古代の文化や思想が一度は失われてしまいます。この中世を経て、再び古代に立ち返ろうとしたのが「ルネサンス（古典古代復興運動）」で、神ではなく人間自身に目を向けようとする傾向が強くなりました。古代の思想や神話、中世の宗教や文学、同時代の社会や政治など、実におおくのエッセンスが融合する時期であり、芸術家たちが新たな展開を求めて試行錯誤した“旨味のつまった時代”だと思っています。

私にとっての美術史の魅力は、コミュニケーションです。美術作品とは、誰かが何かを伝えるためにつくった“視覚的メッセージ”です。私たちは数百年前を生きた人々と顔を合わせることも直接言葉を交わすこともできませんが、美術作品という媒体を介せば、まるで対話するかのように作者の心に触れ、作者の生き様を知ることができます。こんなロマンに満ちた体験を、学生のみなさんにも伝えられるといいなと思います。



（作品が並んでいる室内風景）：フィレンツェには国立保存修復センターがあり、美術作品の修復をしています。ここで受けた大学の授業はとても印象に残っています。



（作品鑑賞中の写真）：ロンドンにて。年に一度は海外渡航してホンモノと会いたいです。

（表紙）：早朝のフィレンツェ
 サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂とサン・ジョヴァンニ洗礼堂

ウィーン留学での視野拡大

私はウィーン大学へ留学しました。入学当初から留学を志し、長年親しんできたクラシック音楽への関心と心理学への興味からウィーンを選びました。

現地では多様な価値観や宗教観を持つ人々と交流し、心理学の授業を通じて自分の視野と理解を大きく広げることができました。心理学の授業ではグループディスカッションが多く、日本よりも活発な意見交換について行くことは、毎回の課題でしたが、様々な意見や考えを聞ける貴重な経験でした。特に、自身が現在研究している「なぜ日本人は漫画などのエンタメコンテンツを通すと宗教を受け入れやすくなるのか」という点について、これまで私は、日本人の視点からのエンタメコンテンツの認識にとどまっていたが、留学を通じて、海外の人々が日本のコンテンツに対して抱く評価や解釈に触れ、その受け止め方が文化的背景によって大きく異なることを理解しました。

さらに、美術館や宮殿、カフェ、教会、バレエ、オペラなどを訪れ、ウィーン文化に触れる機会にも恵まれました。中でも日本大使館主催の「Japan Ball」は特に印象的で、ワルツやドレス文化に触れた経験は、留学中最も楽しかった経験となりました。

このように授業以外でも自分から行動することで学びが深まると感じました。これらの経験を活かし、さらに今後の生活においても異文化交流を深め、視野を広げて、成長していきたいです。 **山本美友 4年**



留学で得た伝える力



私はアメリカのシラキュース大学に留学しました。留学を決意したのは、アルバイトで外国人客に対応する際に、なかなか言葉が出てこなくて、うまく伝えられないことにもどかしさを感じたことでした。もっと英会話に自信を持つために、英語だけの環境に身を置いて実践的に学びたいと思いました。

初めの1ヶ月は授業、友達・クラスメイトとの会話、どの場面でも言いたいことが出てこない経験を多くしました。しかし、現地でできた友達と放課後にダウンタウンに出かけたり、バスケットボールやゲームをしたりすることで、徐々に自分の考えを伝えられるようになりました。英語を「ツール」として楽しく使う感覚が身についてきたのかもしれません。



語学学校の春休みにはニューヨーク市を訪れ、タイムズスクエアやMoMAなどを周りました。とくに印象に残っているのはワシントンスクエア公園で、バンド演奏をしている人、通行人にインタビューする動画を撮影している人、即興で集まって歌っている人たち、ローラースケートを楽しむ親子など、みんなが周囲の目を気にせず自由に過ごしていました。日本では「周りに合わせること」を意識しがちな自分の価値観を見直すきっかけになりました。

この留学を通して学んだことは、「伝えようとする姿勢」が英語力の向上につながるということです。たとえ完璧に話せなくても、積極的に自分から話しかけることがコミュニケーションの第一歩であると実感しました。 **水品皓暉 3年（付属高輪台高校出身）**



モネ没後100年

クロード・モネ ー風景への問いかけ

2026年2月27日、アーティゾン美術館で「クロード・モネー風景への問いかけー」を見学しました。この展覧会は、モネ没後100年を記念して開催されたもので、約140点の作品が展示されていました。その中には、モネの生涯を年代ごとに紹介したパネルや、『睡蓮』から着想を得た映像作品もありました。

また、モネの絵画だけではなくカミーユ・ピサロや、ピエール＝オーギュスト・ルノワールといった同時代の画家たちの絵画や、モネにインスピレーションを与えたといわれている葛飾北斎らの浮世絵が展示されていました。



『パリ、モントルグイユ街、
1878年6月30日の祝日』



作品を通じて、モネの画家としての生涯を学ぶことができました。「ヨーロッパ・アメリカ概論」という講義で中村るい先生から印象派の絵画の遠近感や色使いなどについて学びました。今回の展覧会ではクロード・モネの『パリ、モントルグイユ街、1878年6月30日の祝日』を見て、近くでは点や線のような模様が、遠くからは道を歩く多くの人だと分かります。美術史の授業で学んだ印象派ならではの筆の流れを実作品で体感することができました。

東海大学文化社会学部 ヨーロッパアメリカ学科

◇お問い合わせ・資料請求

〒259-1292
神奈川県平塚市北金目4-1-1
東海大学湘南キャンパス
Tel:0463-58-1211 (代表)
Email:iio@tokai.ac.jp
(飯尾唯紀 ヨーロッパ・アメリカ学科・学
科長)

◇オープンキャンパスの日程

開催日：6/14 (日)
7/12 (日)
8/1,2 (土,日)

お待ちしております
おります♪



東海大学HP



ヨーロッパ・アメリカ学科HP



入試情報サイト



オープンキャンパス情報